初代「黄金の顔」などを展示する施設建設へ

大阪・関西万博を盛り上げる

初代「黄金の顔」は直径10.6メートルで、重さは鉄製フレームを含めて約12トン。写真提供:大阪府

大阪万博の「日本館」で展示されていた「よろこびの塔・かなしみの塔」の巨大タペストリー(高さ9.2m、幅19.2m)やその他展示物も公開予定。入館料、その他の展示物は検討中。写真提供:大阪府

大阪府は、万博記念公園内にある大阪万博のテーマ館のシンボル「太陽の塔」に取り付けられていた初代「黄金の顔」の常設展示を行う施設を建設することを発表した。初代「黄金の顔」は1970年の大阪万博開催以来、1992年の大改修時まで太陽の塔の顔を務め、それ以降は分解されて公園内の収蔵庫に保管されていた。現在、太陽の塔に取り付けられているのは2代目となる。今回の展示施設の建設は、2020年に迎える大阪万博50周年の記念事業の一環として計画されたもの。2025年開催予定の大阪・関西万博の機運醸成にもつながると期待されている。オープンは来年夏頃を予定。大阪万博の出展施設であった「鉄鋼館」を利用した記念館「EXPO'70パビリオン」に隣接する形で建設が進められる。

大阪・関西万博を祝して“思い出の品展”を開催

2025年の大阪・関西万博、開催決定を記念して、「私の大阪万博　思い出の品展」が万博記念公園にて3月9日から開催されている。シンガーソングライターの嘉門タツオさんや漫画家・キャラクターデザイナーの青木俊直さんなど、1970年大阪万博ゆかりの15人から協力を得て、約400品もの思い出の品を展示している。

3月8日に実施された内覧会。左から、MCを担当したミサイルマン西代洋さん、ゲストの河内家菊水丸さん、飼原和子さん、(元ミノルタ迷い子センター勤務)、玉置泰紀さん(株)KADOKAWA2021年室担当部長 エグゼクティブプロデューサー)。

8日に実施された内覧会にも出席した河内家菊水丸さんも、70年の大阪万博で食べた弁当の包み紙や、同年に企画・製作され話題となった松下電器(現・パナソニック)のタイムカプセルのミニチュアなどを出展した。

大阪万博にまつわる、河内家菊水丸さんの思い出の品々。

表現の楽しさを学ぶ

アートの出張授業

多摩美術大学校友会が主催する「出前アート大学」が、校友会大阪支部協力のもと、豊中市立東豊台小学校で2月15日に行われた。
同授業は、アート・デザインを通して子どもたちに表現の楽しさや可能性を伝える出張型授業。
2004年から50回以上にわたって全国の小学校で実施され、今回大阪での初開催の様子を取材した。

4年生の3クラス全員、102人の児童が参加。テーマは「○△□(まるさんかくしかく)を使ってクラスの旗を作ろう」。幾何学図形を切り抜いた型紙を作り、組み合わせた図柄をテキスタイル(布地)に転写する手法で、旗のデザインと制作を行った。

講師はテキスタルデザイナーのシミズダニヤスノブさんが務め、最初に制作実習の内容と、デザインが生活にどのように関わっているかを講義。自身が布生地の加工や染色を行う映像も用意し、仕事のイメージも伝えた。初めてデザイナーの仕事を見る児童からは、「すごく綺麗」「天才!」などの歓声が次々とあがった。

体育館での制作実習では、デザイン案をもとに長辺約2mの旗に布用絵の具とステンシル(型紙)でペイント。児童たちはグループ内で作業を分担し、普段より大きなキャンバスでの作画に生き生きと取り組んだ。同校の松波夏恵教諭は、「みんなで協力して大きなものを作る作業は、通常授業では調整が難しい。専門家の指導も子どもたちにとって貴重な経験です」と話す。できあがった旗には、発想力に講師が思わず唸るデザインも。観賞・講評では、児童から他のグループへの質問が活発に飛び交った。シミズダニヤスノブさんは、「バリエーションに富んでいて、同じようなデザインが一つもないことに驚いた。他の教科のようにはっきりと点数がつくものではないので、楽しく挑戦を続けてほしい」と評した。

多摩美術大学校友会は、芸術文化の発展に貢献することなどを目的に設立された、同大学の卒業生による組織。アーティストやデザイナーなど、約4万人の会員がいる。小学校への出張授業は、プログラムの作成から実施まで、会員のボランティアにより無償で行う。理事の岡田真智子さんは「英語やプログラミングの授業が増え、図工の時間が減っています。この授業でアートやデザインが身近で“自由で創造する楽しさ“を感じてもらえたら」と趣旨を語った。

9グループに分かれ旗のデザイン案をディスカッションする時間では、意見がなかなかまとまらないことも。「みんなを元気づける旗にしたい」というグループに、講師は「元気になる色やデザインって何だろう?付箋に書き出してチームで考えてみよう」とアドバイス。

しっかりとした意思表示を「横断歩道ハンドサイン運動」の実施

協力:大阪府警察

主に信号機が設置されていない横断歩道で、歩行者の安全確保を目的とする運動「横断歩道ハンドサイン運動」。大阪府下の横断歩道では、車両が一時停車しない車が多く見受けられ、安心して横断歩道を渡ることができない現状となっている。そのことから、道路交通法第38条「横断歩道における歩行者の優先」の規定を徹底するとともに、ドライバーに横断歩道や自転車横断帯があることを事前に知らせる「ダイヤマーク」の周知を進めている。

「ハンドサイン」は、横断歩道を渡ろうとする歩行者と、これに気付いたドライバーが、目と目を合わせて安全を確認する「アイコンタクト」に加え、互いに手でも合図(ハンドサイン)し、意思疎通を図ること。歩行者は横断しようとする意思を明確に示すため、手のひら等をドライバーに見せるなど「渡ります」と手で合図(ハンドサイン)を行い、それを確認したドライバーは横断歩道手前で停止し、歩行者に対し「お先にどうぞ」と手で道路の横断を促す(ハンドサイン)といった一連の行動を行うよう推奨している。

横断歩道を渡る際は意思表示をしっかり行ったあと、左右の安全を確認して渡るよう心がけよう。

▲大阪府警察交通部YouTube公式チャンネルでは、啓発キャラクター「ダイヤくん、ダイヤちゃん」の動画などを公開